

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）
留学結果報告書

令和 7 年 8 月 19 日

山梨県知事 殿

本人氏名

加藤真央

次のとおり留学の成果を報告します。

留 学 先 国 名	フランス共和国
学 校 等 名	トゥールーズ・ジャン・ジョレス大学
留 学 期 間	令和 6 年 9 月 1 日 ～ 令和 7 年 7 月 23 日
<p>【学習成果の概要】</p> <p>フランス語が母国語でない学生に向けた大学の方法論や口頭発表の授業を取りつつ、後期には移民の社会学、地域診断、ヨーロッパのフェミニズムといった講義を受講しました。日本の大学で学んできた移民の包摂について多角的に、かつフランスの文脈から考察できたことは一つの収穫でした。当初に掲げた①移民統合に対する批判的思考を養う、②フランス語運用能力を習熟させる、③文化的背景の異なる人と関係性を築くという三つの目標は、完璧でないにせよ達成できたと思います。</p> <p>【出発前後の手続き、準備】</p> <p>出発前後の手続きには大まかに次のものがありました。必要書類を揃えるのに数週間かかる場合もあるので、出発の夏を意識しつつ余裕を持って進めました。</p> <p>出発前：ビザ、保険、航空券、クレジットカード、入寮準備、履修登録 出発後：入寮、電話回線の契約、交通定期の発行、履修相談、銀行口座の開設、住宅補助・社会保険の申請</p> <p>準備としては、自分が何をしたいのか具体的に決めておくことが肝要です。実行する前段階まで下調べしておくことで、現地での活動の幅を広げることができたからです。フランスに渡航した後も、やりたいことを思いついたらネットで調べ周囲の人に聞いてみました。全く意外なところからご縁を頂くことや新たな交友関係が生まれることもあったので、発信することの大切さを実感した経験でした。</p> <p>【留学中の経験】</p> <p>学習面ではアウトプットに重点を置くことで、望ましい学習効果が得られたと感じ</p>	

ます。レポート作成で学びを整理するのはもちろん、グループでの意見交換や対象へのインタビューの実施は、問いを発展させるのに役立ちました。また膨大な知識量に圧倒される場面であっても、分からないことを放置しないよう心掛けました。最初は話の流れを遮って質問するのに勇気がいりましたが、受け身で聞き流しているよりも効果的と分かってからは積極的に声に出すようにしました。生きた文化に触れるチャンスを最大限活用できたと思います。

7歳の子どもから80歳のお爺さんに至るまで、様々な考え方を持つ友人と繋がれたことが前回の留学から成長した点です。かれらとの対話の中で相手の考えを勝手に決めつけないことが大切だと学びましたし、もっと相手のことを知る意欲も湧きました。またフランスに生きる人の多様性に触れてみて、知らず知らずのうちに生き急いでいた自分の姿を省みることができました。留学生活によって日本で身につけた社会規範から相対的に解放され、主体的な個人として生きる術を学べたと思います。

フランスでは10月、12月、2月、4月に2週間のバカンスがあります。こうした長期休みには一週間ほど農業のボランティアをして過ごしたり、友人とスポーツをしたりしました。特に印象に残っているのは計10日間パリに滞在したことです。パリに住む友人とともに、博物館のような街をワクワクしながら歩いたことを思い出します。また南仏の小さな町を知り合いつてに訪れたことも、オクシタニー文化に触れる良い機会となりました。人や場所との縁が深まり、以前よりフランスが身近になったように思います。

【寮生活、その他生活】

9月から7月までの11か月はCrousによって運営される学生寮で生活しました。キッチン、シャワー、トイレ付きの個人部屋で、家賃は補助付きで173ユーロと良心的でした。寝具や日用品だけ購入すれば良い設備だったものの、入居した部屋に虫の問題がありました。翌日他の棟に移る対応をして頂き、その後大きな不便なく過ごすことができました。不安要素を放置しておかずに相談する大切さを学んだ出来事です。

トゥールーズは人口50万人のうち10万人以上が学生だと言われています。街の中心地には学生向け窓口が設置されており、国内外の学生が生活基盤を構築できるよう手厚い支援が受けられます。渡航当時は知り合いも少なく、とりあえず足を動かして情報収集をするしかない状況に食傷することもしばしばでした。これまで周囲の人の支えにどれほど助けられてきたか痛感しました。こうした生活の諸手続きを通して自立の一步を踏み出すことができたと思います。

【留学中の問題点・困難な点】

全く新しい環境で良い精神衛生を保つことは至難の業だと感じました。留学先では常に挑戦の連続ですから、失敗やプレッシャーと向き合い続けなければなりません。また、目に見える特定の属性を相手からスティグマ化され、悪意を持たない差別をされた時には堪えがたい悔しさを感じることもありました。こうした状況に際して前向きにものを運ぶ方法は一つ、行動するしかありません。不安や鬱憤は詰まるところ頭の中で考えているから解消されないのだと思います。このことに気づけたのは留学生活の大きな

収穫ですし、その後の物事に取り組む態度が主体的になったのも嬉しい結果でした。

留学当初は新たなコミュニティに飛び込んでいったため、心地よく感じる居場所をすぐに作れず、実際はそうでないのに孤独を感じることがありました。図書館で一人パソコンに向かっていると、私は自分のしたいことをやりに来ているはずなのに、確証の無い道を彷徨っているような不安に駆られるのでした。そんな時図書館で声をかけてくれたり休日外出に誘ってくれたりする友人の存在は心の支えになりました。かれらと一緒に頑張っていると知り、自分の置かれた状況を客観視することができたからです。留学中は挑戦する機運が高まっているので、馴染む自信が無くとも試してみたら良いのだと思えました。

【留学の目標と達成度】

今回の留学では、①移民統合に対する批判的思考を養う、②フランス語運用能力を習熟させる、③文化的背景の異なる人と関係性を築くという三つの目標を掲げました。

①については、移民の統合をフェミニズムや都市政策の観点から検討し、現状の取組や社会的な言論について賛否両方の意見から物事を見れるようになりました。例えばフェミニズムの授業で扱ったフランスのスカーフ論争では、スカーフ着用がムスリム女性抑圧の烙印であるという西洋的見方に対して、自らのアイデンティティを表明するムスリム少女の存在が指摘されました。学校における政教分離が少女の解放と統合を進める時、フランス国家のパターナリズムによって教育現場から排除される少女が生まれるという事実は、自分の一方的な物事への見方を崩す気づきとなりました。

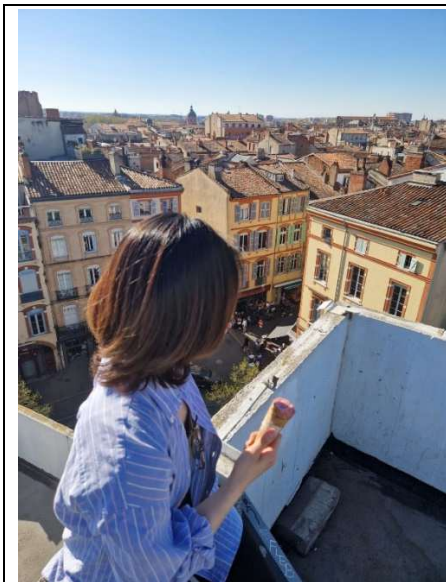
②については外国人向けのフランス語の授業を受講する中で、求められているフランス語の技能や語彙の選択について知識が深まりました。ただ単語を覚えるだけでなく、どんな状況で使うか類似表現はあるかといった部分を一つ一つ覚えていくことで、表現力が向上したと感じます。また、ネイティブの友人たちとの会話は生きた表現を学ぶ絶好のチャンスでした。知らない単語や表現のみならず場所や歴史的人物の背景知識にも触れることが出来たため、住んでいた土地やフランス国家についてひとしお興味が湧きました。言語能力に不足はあるものの、相手に伝わる表現をしようと試行錯誤した時間は決して無駄ではなかったですし、再び友人たちに会える日まで更なる実践を重ねていきたいと思います。

③については以前の自分からは考えられないほど行動力が増して、会いたいと思った方とお会いすることができたのが大きな成長だと言えます。大学では乗馬やクライミング、日本語学部や社会学部の授業を通じて友人を作り、充実した生活を送ることができました。学外では農業関係者を中心にコンタクトを取り仕事を体験させて頂いたり、現地の日本人と繋がったりした他、高校生の時にホストしてもらったホストファミリーとも再会しました。ホストファミリーとの対話で前は聞けなかった考え方に接した時、また会えて良かったと心から思いました。生まれた場所も育った環境も全然異なる人たちですが、お互いに共感できる部分を見つけながら関係性を深めていけたことが心に残りましたし、自分の自信にも繋がりました。

【今後の目標】

一年間フランス語と多文化共生を学んだ今、以前より「なぜ？」と問うことが増えました。決して悪い意味ではなく、違う視点から物事を見れるようになったり情報感度が高まったりした結果かと思います。一年前より視野が広がり、選べる未来の可能性が広がったという点から、フランスで学んだ意義を果たせたと感じます。ネイティブと比べた時のフランス語の拙さや論理的思考力の未熟さは指摘できるものの、過去の自分からは大きく成長した姿になりました。フランス語や研究における発展の余地を信じ、大学院進学に向け目の前のやるべきことに集中して取り組んでいきます。

フランスでの留学を実現することが出来たのは、偏に山梨県大村智人材育成基金の奨学金を支給して頂いたためです。奨学金の申請や報告書の作成に携わってくださった担当者様、及び関わってくださったすべての方に感謝申し上げます。今後は山梨県で大学生活を送りながら地域活動により一層精進してまいります。このご縁を忘れずに日々感謝できる自分でありたいと思います。



バラ色の街トゥールーズの景色



初めてのヴィア・フェラータ



ピレネー山脈での雪山登山



フォアグラの直売場



ガラスでの香水作り体験



伝統的な遊び、ブルトン・ペタンク



仲良くなった子どもたちと一緒に



南仏のひまわり畑